

お薦めの本を紹介し、聴衆が最高の一冊を決定する競技「ビブリオバトル」というユニークな書評合戦が、広がりを見せている。会社の新人研修や書店のイベント、サークル活動…。大学の研究室から生まれた新たな試みが、活字離れへの起爆剤、自己啓発、人をつなぐツールとして受け入れられているようだ。

(横山由紀子)



制限時間内で本の魅力を熱く語る挑戦者―大阪市北区の紀伊國屋書店梅田本店

# 私の言葉が生む 「最高の一冊」

考案者は、立命館大学情報理工学部の谷口忠大准教授。京都大学の研究員だった平成19年、研究室の輪読会を活性化させようと、学生たちとの間で生み出した。制限時間は5分。カウ

ントタイマーを横目で見ながら即興で本の魅力を説く。聴衆が挙手で読みたい本を選ぶゲーム性を取り入れた競技だ。トーナメント式のイベントを開くうち、大阪大学や名古屋市立大学など各大学のサークル活動

## 魅力語る書評合戦 ビブリオバトル

大学への取引でビブリオバトルを知った紀伊國屋書店が昨年、本町店（大阪市中央区）や新宿南店（東京都新宿区）で行ったところ、好評を博した。

5月21日には、梅田本店（大阪市北区）で開催。老若男女8人の挑戦者が100人ほどの聴衆を前に、歴史書やライトノベル、SFなど、さまざまなジャンル



先輩たちが見守る中、ビブリオバトルに臨む  
新入社員―那覇市の医療商社「琉球光和」

の自薦の書を熱くアピールした。結果は挙手でその場で決まる。2ラウンドの決戦で、「言葉の旅をしてみてください」との語りかけで聴衆の心をとらえた『絵で読む漢文』（朝日出版社）と、『アメリカン・スクール』（新潮文庫）の2冊がチャンプ本に選ばれた。

挑戦者の一人、大阪市淀川区の越智栄梨華さん(24)は、書店のホームページを見て参加した。「人前でしゃべることは緊張するが、好きな本に関してなので自分の言葉で魅力を語れた。現在、フリーターなので、会社面接の自己アピールに

とても役立つと思う。自分を磨くいい経験になった」と満足げな表情だ。

■社員研修

ビブリオバトルを新人研修に取り入れた会社がある。沖縄県の人気就職先企業ランキングのトップ5に入る医療商社「琉球光和」（那覇市）の秦一社長が、ビブリオバトルに関するツイッターやホームページを見て、「これだ」とひらめいた。

今年4月、新入社員8人が、先輩社員を前にビブリオバトルに挑戦したところ、「人前でしゃべること一度胸が付いた」と前向き

な声が多く聞かれた。今後、社員研修の一環として毎月1回、全社員が挑戦者となってビブリオバトルを開催するという。

秦社長は、「社員に多読を習慣化させるのが狙いです。多くの本を読むことで、幅広い視野で行動できる人になるはず。また、意見交換が上下関係や部署などの枠を超えて行われてほしい。ビブリオバトルにはそんな可能性を感じる」。

また、大阪市の企画広告会社「ウェイヴ インターナショナル グループ」の西岡謙二社長は、紀伊國屋書店梅田本店で行われたビブリオバトルを見て、来年の新人研修に取り入れることに。「これまで本を読んでも感想を書かせる研修だったが、これならプレゼン能力も磨かれ、社員同士の親睦にもなる」と説明する。

谷口准教授は「ネットを介して、ビブリオバトルの魅力を知ってくれる人がいるのも興味深い。一過性のブームに終わらず、子供が遊びの中にも取り入れるような普遍的な存在として浸透してほしい。そんな無限の可能性を持つ知的書評合戦だと信じている」と話している。